

里地通信 2002年 1月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階(財)水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

第17回目イオングループ里山保全活動

進化したツーリズムを考えよう 沖縄県恩納村

平成13年12月8日～9日

恩納村(おんなそん)は、サミット先進国首脳会議の会場となり国際的にも知られる村です。万座ビーチホテル、ムーンビーチホテルなど、名前だけならほとんどの人が耳にしているのではないと思うリゾート観光の名所です。一方、NHKテレビ連続テレビ小説「ちゅらさん」にでてきた「おばあ」のような暮らし振りを楽しむ方々もそこには住んでいます。17回目の保全活動は、これまで大規模なツーリズム中心だった恩納村へのリゾート観光のゆきずまりから、地域の自然と文化を楽しむ進化したツーリズム(エコ&グリーンツーリズム)の検討を行えないかという課題をいただき、沖縄リサイクル運動市民の会、エコビジョン沖縄の皆さんと共に実施しました。

進化したツーリズム

進化したツーリズムを考えると、私は平成12年に合同出版から農と食の環境フォーラムの牧下圭貴氏とともに出版した「進化したツーリズムを考える、エコシティーみなまたの歩き方」という本をあらためて思い返しました。この本の冒頭にご登場ねがったのは、水俣市の高原でお茶農家を営む天野茂さんです。天野さん家族の仕事は、その土地の山で育ったお茶の木から落ちた実生の苗を集め畑とし、強い苗だからこそできる無農薬有機栽培を行って



ます。お茶は年に2度ほど茶摘をし、1度目は緑茶、2度目は紅茶と番茶としています。この天野さん家族は、日本の無農薬紅茶の20%を生産する農家でもあります。人にもお茶にも自然にも負担をかけない生産方法と、空いた時間を、田んぼやビオトープづくり、いのししとの一騎打ち、囲炉裏であぶる猪肉やマムシ、...、雑木で作るゴーカー(だいごろう)遊びなどで日々楽しんでいます。この天野茶屋は、全国から変わった人が集まる密かな拠点になっています。遊びと暮らしと仕事が、地域の風土と生活文化の中でつくられているのが特徴です。この天野家族を恩納村にお呼びし、「進化したツーリズムを考える」というテーマで、私と対談形式で講演(まんざい)を行っていただきました。「あたりまえの生

活を楽しんでもらうこと」でも「ヨソからきた人にとっては、石飛の暮らしはあたりまえじゃないんですね」石飛にくると「目が飛びでたり、口がふさがらなかつたり、無邪気に遊んでいますよ」「一度来た人は何度も来ますね...」これまでのツーリズムとは異なる天野流の「何も与えない、何も無い、ありのままのもてなし」に会場は低くうなづくようにざわめいていました。

か まど作りとツーリズムメニュー開発
天野茶屋の名物はなんといっても囲炉裏、この囲炉裏で天野さんが狩猟採集したものを何でもあぶります。ではとばかり、沖縄ならば「琉球かまど」。食文化の見直しから地域で伝統的な作物の種類が復活し、料理が始まり、そこから枝集めや植樹など、里山づくりも始まるに違いない。美味しいこと楽しいことを中心にすえると運動が継続するはず。かまどを中心に、植生、里山管理、ツー

リズムメニューの増加、...と勝手な仮説を立て、かまどづくりを開始しました。イオン環境財団の岡田理事長、琉球ジャスコの方々、沖縄リサイクルの方々、地元恩納村の方々、およそ100名ほどで、かまどづくり、昔ながらの海水を使ったゆしどうぶづくり（ゆしどうふ）、サーターアンダギー（砂糖を油であげるという意味のおかし）、野草の天ぷら、紅芋料理などなど、シサーづくり（赤土で作る獅子、守り神）も行いました。

かまどの技術

沖縄では、ここ30年程かまどづくりは、ほとんど見かけられなくなりました。このため、つい最近もかまどを作ったことがあるよという三重県伊勢市に近い佐官職人の齊藤吾郎さんと土木屋であり自然観察指導員の城山清さんを招いて、かまどづくりの技術を披露してもらいました。



かまどづくりは、大人も子どもも全員参加。どろんこ遊びが仕事になります。

ツーリズムは進化していく

昨年より環境省・農林水産省の呼びかけで、「共生と循環の地域社会づくりモデル事業」が佐渡島と屋久島で実施され、島興しに活力が注がれているが、近々この沖縄でもその一連のモデル事業が始まろうとしている。

このモデル事業は、これまでのハード面における徹底した基盤整備に対していくつかの提案を示そうとしている。それは、次世代までを含めた人と人との共生の課題、身近な生き物を中心とする多種多様な生き物、地域の固有種などを育む亜熱帯特有の自然と人との共生の課題、ひいては今を生きる我々人類のライフスタイルと自然環境との関係を問い直す事業でもある。

農林水産省では、構造改善局が2001年1月、農村振興局と名称変更され、農村整備の方向性に新たに「環境との調和」という理念が加えられた。この「環境」という言葉には、様々な概念が含まれているであろう。農村に代々伝わる自然の恵みを活用して暮らす智慧、地域で生息する様々な生命と共生する智慧、そして、地域の恵を活かす食文化やそれらを風土と共に活用する智慧など。生物の多様性保全だけでなく、先人から伝えられた伝承技術や生活文化を地域特有の社会環境と捉えた「環境との調和」が根本的に求められていると解釈している。

地域固有の植物や農作物の種を復活させ、地域で育て、人々の手で収穫し、恵みとして感謝しながら食する営みの中から、揺るがない叡智が湧き出でてくる。

こうした土地固有の生活文化の見直しは、山や里、川や海の環境、さらにはそれを次世代にどう繋いで行くかという教育のあり方について考える引き金ともなりうる。

12月8日、9日の両日、恩納村で（財）イオン環境財団（岡田卓也理事長）、沖縄リサイクル運動市民の会及び特定非営利活動法人エコ・ビジョン沖縄（古我知浩理事長）、恩納村エコツーリズム研究会（仲西美佐子会長）らが主催し、モデル事業の足掛かりをつくる。

8日には午後2時より恩納村コミュニティーセンターにて環境政策の先進地として注目されている熊本県水俣市でお茶農家を営む天野茂さん一家を招き、様々な人々が訪問している水俣のグリーンツーリズムについての講演が行われる。天野さんは水俣市の山間部で全国の国産無農薬紅茶の2割を生産し、水俣市エコツーリズムの「環境を学ぶ体験プログラム」において、お茶作りの体験と無農薬による作物栽培と山里の暮らしの紹介や、休耕田をビオトープにし、自然界で生き物が共に生きている様子を子供達と身近に観察することを実践している。まさに地に脚のついた彼らの取り組みからは、多くの刺激を受けるであろう。9日には午前9時半より夕方まで南恩納地区で伝統的なカマド作りと薪で炊くゆしどうふや野草の天ぷら作りなどのていーあんだ料理のイベントが行われ、温故知新を基盤とする「進化したツーリズム」を考える契機となりそうだ。両日ともに参加費は無料。是非多くの方々の参加してほしい。催しについての詳細、問合せは恩納村エコツーリズム研究会TEL966-2441まで。

里地ネットワーク事務局長 竹田 純一

掲載日：12月7日 沖縄タイムズ

里地ネットワーク設立後第5期を展望する

事務局長 竹田純一

里地ネットワークは、本年2月25日で満4歳の誕生日を迎え、いよいよ第5期の活動を開始します。新たに会員になられた方もたくさんおられますので、これまでの取り組みを4年間の総括として簡単に触れさせていただきたいと思います。

里地ネットワークとは、

日本の近代化（＝大量生産型、浪費廃棄型、非循環都市型）により失われつつある「里地・里山」の暮らし（＝循環・共生・参加型）を見つめ直すことによって、これまでの開発（鉄とコンクリートと石油に象徴される20世紀型の開発）から、日本人が代々伝承してきた持続のシステム（地域固有の知恵や技術、太陽と風、水、土、木に象徴される伝統の技）を継承した地域社会づくりを実践する組織です。

言いかえれば、地域社会と自然環境を見つめ直すことで、21世紀にふさわしい共生と循環の社会システムの創造を目的とする組織です。このために核となる活動は、現場に入り、地元の方と共に、直接生活文化を見つめ直す活動です。この見直し作業の延長線上に、人づくり、ものづくり、地域づくり（学習方法、産品開発、流通開発、ツーリズム開発、環境保全策、地域計画、エネルギービジョン等など）を各専門家を交えて行っています。里地ネットワークは、事務局と会員、専門家、行政、メディアがそれぞれの役割に応じて、このような活動を共に育む実践行動型のネットワーク組織です。

活動の発端と経過、今後の展開

里地ネットワーク設立まで

平成8年、環境省の若手職員、京都大学工学研究室の内藤正明教授（座長、現在：代表幹事）らによって、環境省内の勉強会（里地研究会）がスタートし、全国各地の里地の現状と課題を「里地からの変革」としてとりまとめました。しかし、机上の調査や報告集を作成するだ

けでは里地の課題は解決されず、高齢化過疎化によってとりまく環境は悪化するばかりであるため、全国各地の里地の活動家と知恵をもった専門家や市民、メディアや行政官をネットワークし、相互に実践支援しあう緩やかなネットワーク組織が必要だという認識に至りました。この認識をもとに、環境省、農水省、国土庁の各担当部局に事前相談し、平成10年2月25日、省庁の枠を越えたNGOとして設立総会を行い活動を開始しました。総会へは、研究者、企業、市民、メディア、行政担当者ら300人を越える参加を得ました。

平成10年度(第一期)

初年度は、全国12カ所での先進事例調査とシンポジウムの開催を行い、里地ネットワークに求められている課題の抽出と、現場の課題を解決するための技法や技術、方法論の調査研究を行ないました。

平成11年度(第二期)

初年度の調査を受けて、里地において機能する方法論、もとめられている技術を里地ネットワークの事務局、研究者、各地の活動リーダーの間で共有するための連続セミナーを20回開催しました。この連続セミナーの結果、「水俣の地元学」「西日本科学技術研究所の近自然土工法・近自然河川工法」「山形県米沢郷牧場の自然循環農業集団リサイクルシステム」「京都大学内藤教授の持続可能な社会論」「農林水産省の長谷山教授の活性化論」などが、現場の課題を解決させるために大いに役立つ可能性を秘めていることが認識されました。この内容は「里地セミナー報告集」として頒布中です。

全国各地で引き継がれてきた循環型社会に役立つローカル技術の調査研究を行い、里地で役立つ環境保全型技術集「温暖化対策から始まる元気な地域づくり・里地からのチャレンジ100事例集」を出版しました。この技術集は、全国の新聞雑誌の注目を集め、制作した8000冊が

ほぼ頒布されました。

平成12年度(第三期)

全国各地の里地里山の課題を解決し、その活性化を図るために(財)イオン環境財団と共に全国20箇所の里地里山で保全活動を開始しました。本年3月10日に、第20回記念シンポジウムを開催し、北海道から沖縄まで、3年間で20箇所の保全活動という当初計画を貫徹します。この内第1回から10回までの活動を「**里地里山で遊ぼう/里地里山保全ノウハウ集**」としてまとめ、現在頒布中です。

熊本県水俣市で1991年より行われている「もやい直し運動」(地元学)の調査を行ない、新しい水俣を私たちが学び、相互交流できるように、水俣のツーリズムを3度ほど実践しました。この内容は「**エコシティーみなまたの歩き方**」として合同出版より出版しました。

通産省の地域エネルギー政策である地域新エネルギービジョン及び省エネルギービジョンの策定を、その土地に残された伝承技術や生活文化の上に再構築する方法により、東北電力の関連会社とともに行いました。このビジョン策定を通して、地域内エネルギー政策の課題を確認すると共に、地元学の手法の可能性を確認しました。

環境省の、佐渡島における「トキ野生復帰プロジェクト」共生と循環の地域社会づくりモデル事業がスタートしました。平成14年度までの3カ年計画で実施中です。

環境省廃棄物リサイクル対策室の物質循環データベースの作成事業を行い、全国の廃棄物・リサイクル対策先進事例を調査しました。データベースはホームページにて公開中です。

平成13年度(第四期)

農林水産省農村振興局の事業で、トキの野生復帰プロジェクトの農村振興版ともいえる「人と自然が織りなす里地環境調査」事業を実施しています。この調査の内容に関しては、昨年12月の通信で概要をお知らせとありますが、現地調査、検討委員会の他にアンケートを実施しています。こちらへのご協力をお願いいたします。な

お、第5回検討委員会は、農林水産省にて、2月6日(水)に行いますので、ご関心のある方は事務局までご連絡ください。

イオン里地里山保全活動、トキ野生復帰プロジェクト、物質循環データベースの事業は継続実施中です。

これまでの活動の補足資料としてメディア等に発信した寄稿文を一部訂正しホームページにアップしました。こちらも含めてご覧いただければ幸いです。

今後の展開(第五期)

第五期の展望は、これまでの現場中心のフィールドワークに加えて、以下の点を重点課題として取り上げていきたいと考えております。

- ・文化と生物多様性を重視した里地環境整備の指針づくり
- ・点から線、線から面へとステップアップさせてゆく里地環境整備のシステムづくり
- ・一つの集水域をまるごと共生と循環の地域社会に転換させるためのビジョン
- ・環境、文化、教育、産業を見通した里地環境政策全般への政策サポート

第五期のスタートにあたり(財)イオン環境財団と里地ネットワーク主催のシンポジウム「里地里山をデザインする」(ビジュアルプレゼンテーション)を3月10日(日)ケビン・ショートさんのお膝元、千葉県印西市で行います。3年間で行ってきた19回の保全活動から得た方策をビジュアルで紹介するとともに、21世紀の里地里山づくりの理念と技術、持続可能社会づくりの核となる視点を、分かりやすくプレゼンテーションいたします。

これは3年間の保全活動の記念シンポジウムであるとともに、これまでの総括でもあるという気持ちで開催いたします。

詳細は後記の通りですが、会場の都合で定員を400名とし、先着順の登録制(入場無料)にて行う予定です。申し込み欄を設けましたので早めにFAXでお申し込みください。なお、遅くなりますと、地元NPOの方々のお申し込みを開始する関係で入場を締め切らせていただくことがあります。あらかじめご了承ください。

イオン・里地・里山保全活動 第20回記念シンポジウム

21世紀の持続可能社会・里地里山をデザインする

日 時：平成14年3月10日（日） 12時開場 / 13時開演 / 17時終了
場 所：郵便局コミュニティーセンター ホール（〒270-1342 千葉県印西市高花2-2）
主 催：（財）イオン環境財団、里地ネットワーク 協力：ラーバン千葉ネットワーク
後 援：環境省、農林水産省、千葉県、印西市
参加費：無料

開催趣旨

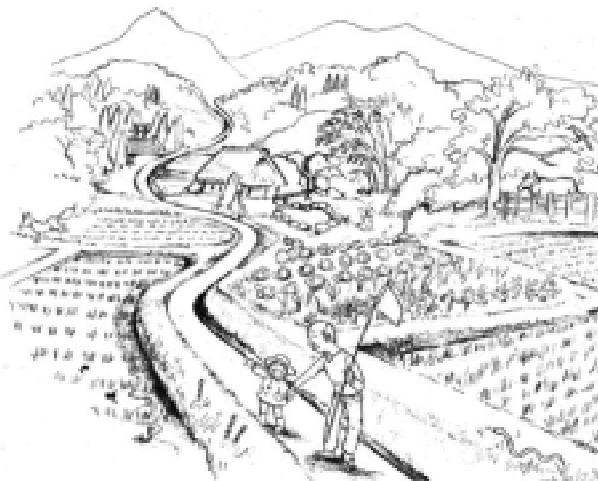
里山に木もれびがさし、ふもとは田んぼが広がる。小川がせせらぎ、小鳥がさえずる。ホタルやトンボ、そして、子どもたちの笑顔が飛びかう…。そんなふるさとの原風景が里地里山です。この豊かな自然は、地域の風土に根ざし、農林漁業などの人々の働きかけによってつくられた二次的な自然です。そこには、人と人、人と自然が共生した生活文化と智恵、技術が、長い歴史の中で引き継がれ淘汰され伝承されてきました。

この地域固有の文化は、昭和30年頃まで日本中どこにでも存在していました。しかし、その後の社会環境の変化により、里地里山は放置され、結果として植生の遷移が進み、生物多様性は薄れ、人々は共生と循環の仕組みさえも失いかけている現状で

す。

21世紀を迎えた私たちの暮らしには、自然と共生する智恵と技術、地域内物質循環の仕組みが求められています。今あらためて、ふるさとの原風景、里地里山のメカニズムが見直されはじめています。（財）イオン環境財団と里地ネットワークは、それぞれの風土で育まれた里地里山の文化を再発見し、子どもたちの世代に引きつぐために、土地固有の課題を背景に、全国各地で保全活動を実施してきました。私たちの保全活動の試行錯誤と、各地での実践研究者たちの経験と英知を集めこのシンポジウムを開催いたします。

このシンポジウムを通じて、21世紀の持続可能な地域社会、里地里山を皆でデザインしましょう。



プログラム

スライドショー / 12時15分～12時50分
第1回から18回までのイオン里地里山保全活動の紹介

シンポジウム / 13時00分～16時45分
司会 / ケビン・ショート、竹田純一

開会のご挨拶 / 岡田卓也 (財)イオン環境財団理事長
開催地ご挨拶 / 堂本暁子 千葉県知事 / 海老原栄 印西市長

風 / 水 / 土 / 石 : 近自然工法で土木工法を見直す
福留脩文 西日本科学技術研究所所長
食 / 農 / 流通 / 健康 : 見つめ直す食文化
根岸久子 農林中金総合研究所研究員
里山林 / 整備 / 市民 : 市民による里山林整備指針
中川重年 神奈川県森林研究所
集落 / 交流 / 担い手 / 集落計画 / 里地機能圏域のビジョン
河原利和 集落デザイン研究者

【ビジュアルプレゼンテーション】
森のゼロエミッション / 農村振興の新たな方策 / 生物多様性 / 里地里山保全施策の全体像
内藤正明 京都大学大学院環境地球工学研究科教授
農村振興と環境との調和 農水省農村振興局資源課室長
里地保全と生物多様性 環境省自然環境局生物多様性企画官

【ディスカッション】
「21世紀の里地里山をデザインする」
大島康行 / 内藤正明 / 福留脩文 / 根岸久子 / 中川重年 / 河原利和
閉会の辞 ケビン・ショート

「イオン・里地・里山保全プロジェクト」第1～20回実施内容

1999年 8月	秋田県由利郡象潟町	「ブナ植林と紙芝居づくり」(活動コンセプト拡大)
2000年 2月	愛知県知多郡美浜町	「里山カーニバル」(白炭窯づくりと竹林整備)
2000年 3月	島根県太田市三瓶山	「21世紀に伝えたい三瓶の草原」(草原の野焼き)
2000年 4月	長野県飯山市	「北竜湖・小菅の里保全活動」(森林施業と技術)
2000年 6月	三重県鈴鹿市加佐登神社	「白鳥陵の復元」(石組みの修復と近自然工法)
2000年 7月	山形県最上郡最上町	「里地たんけん学校」(地元学、小学校における総合学習)
2000年 7月	岩手県沢内村	「西和賀の里と生活文化の探検隊」(集落地元学)
2000年 8月	北海道紋別郡白滝村	「食べる人がつくる農業」(開拓大規模農業と自給的農業)
2000年 9月	神奈川県横浜市	「里山で遊ぼう」(自然観察の森とインタープリター)
2001年 2月	埼玉県所沢市ほか	「緑の三富再発見」(里山の危機、所沢市・三芳町・川越市・狭山市)
2001年 3月	埼玉県比企郡小川町	「自然エネルギー学校」(里地資源のエネルギー利用)
2001年 5月	新潟県佐渡郡新穂村	「トキの野生復帰をめざして棚田の復田」(トキとの共生)
2001年 8月	秋田県山本郡二ツ井町	「森で遊び林業を考える学校」(杉、林業、建築の未来)
2001年 9月	三重県員弁郡藤原町	「ケビンショートの自然観察会」(集落ビジョン)
2001年11月	宮城県田尻町	「蕪栗沼ガンと湿地の保全活動」(治水・自然・農業の共生)
2001年11月	京都府綾部市	「里地たんけん隊」(田舎暮らしとツーリズム)
2001年12月	沖縄県恩納村	「美味しい里山づくり」(進化したツーリズム、カマドづくり)
2002年 2月	東京都町田市	「ふるさとの原風景・三輪の里山をたずねて」(谷戸保全と自然観察会)
2002年 3月	千葉県印西市	「農都一体型の地域づくり」(ニュータウン住民と農家の協働による地元学)
2002年 3月	千葉県印西市	「21世紀の里地里山をデザインする」(イオン里地里山シンポジウム)

イオン里地里山保全活動 第20回記念シンポジウム参加申込み Fax:03-3500-3841 (先着500名)

お名前		性別		年齢	
電話		E-mail			
住所	〒				
所属					